令和六年 文化祭 部誌

目次

重い荷物 …… Ｐ２
課題 …… Ｐ５
夜明けの夢 …… Ｐ７
おすすめ本紹介 …… P11
＊博士の愛した数式 …… P12
＊クスノキの番人 …… P13
＊アルジャーノンに花束を …… P14
目指せ校閲ガール
（校正・校閲をしてみよう） …… P15

重い荷物

高１のちょうど秋の中頃である今日、私はとても重い重い何かを背負いました。

昨日は彼の誕生日でした。
そんな彼の誕生日に行われた催しは彼のお葬式でした。
つい最近までいた彼がこの世からいなくなってしまったのです。
それは一昨日のことでした。
私と彼は同じ部活でその日は夜遅くに部活が終わり、雨も降っていたので家まで送ると彼が言ってくれたのです。本当は断る方が良かったのですが、正直なところ私は彼のことが好きだったので、できるだけ多くの時間一緒にいられることはとても嬉しく、断ろうにも断れなかったのです。そして結局断らなかった私は楽しく彼と「あの先生の授業では絶対誰か５人はいつも寝ているよね」とか、「今日の小テストは珍しく勉強したのに点数が取れなかった」などと他愛ない会話をしながら帰っていました。そしてそんな楽しい時間もあっという間に過ぎて家につきました。
明日は彼の誕生日を祝うため、彼と私を含めた数人で遊園地に行く予定でした。なので彼は明日を楽しみにしている、そんな笑顔で「また明日！」と言い、私も「うん！楽しみにしてる。気をつけて帰ってね！」と返し彼は自分の家の方向へと帰って行きました。しかし彼の家は私の家とは学校を挟んで反対方向にあったので家の中で私は、彼があの後風邪を引かないか、転ばないか、事故に巻き込まれたりしないか、そんな心配ばかりしていました。こういうとき、何故か嫌な妄想ばかりしてしまう…そんなことはありませんか？
今考えると彼の事故を私はどこかで予感していたのかもしれません。

そして数時間後、彼の母親から彼が帰り道の途中で、事故にあったと電話がありました。
それを聞いたとき、私は夢だと思いたかったのですが、足の力が抜け、地面に叩きつけられた私の体の痛みは間違いなく現実にいることを私に認めさせようとしていました。
そして次の日には彼が亡くなったことを告げられました。彼の母親は仕方のないことだと言い、私を責めませんでした。

この事故はいったい誰のせいなのでしょうか。今、私はそれを私のせいだと思っています。いいえ、思うと言うよりはそう思う以外に気持ちのやり場はなく後悔をしているという方が適切と言えるでしょう。この事故の経緯を彼の母と私の母に話したところ、私の母に「私が彼の母親ならあなたを恨むでしょう。そして私はあなたを自分の欲望を優先し、人のことを考えられないそんな人に育てた覚えはありません。あなたのしたことをもう一度考え直し、反省をしなさい」と告げられ、ごもっともだと思いました。
その言葉は正論でとても私の胸の奥深くに刺さりました。そしてその針はずっと抜けないで刺さったまま取れませんでした。
私は涙が零れそうでした。けれどその涙を流す権利はないと、涙を流したいのは彼の家族の方たちなのだと思いました。
お葬式で私を責めないで、私に、そして周りにいた人たちに「そんな顔しないで、笑顔でいてください。そのほうがあの子も笑顔でいられると思うし、それが一番あの子らしい姿だから」と言う彼の母親からは彼の面影を感じました。

彼は皆から愛される人でした。目立った行動を好み、皆から「なにしてんだよ～」と言われながらも、周りの人は皆笑顔で、そうやって彼の近くは

いつも明るく、いいえ…明るくする力が彼にはあり、嫌な顔をする人は誰一人としていませんでした。そんな誰にでも優しく、自然と人を笑顔にさせる彼が私は好きでした。一方的な片思いだったかもしれないけれど、
私の高校生活は彩られていきました。あぁ…彼を好きなのは過去ではなく今もとてもとても大好きです。
まだ彼がいないこの世界に現実味はなく、
モノクロのただ目の前を流れてゆく景色みたいです。
現実味がないのはたぶん…現実を認めたくないせいで、でも彼がいない空いた席の空間が私にそれは現実だと突きつけ、心がここにいたくないと叫んでいるからなのかなと感じています。
それから一度は彼と一緒のところへ行ってしまおうか、とも思いました。だけど、そんなことをしても彼は笑顔を見せないだろうと予想がついてしまうところにも、また彼の人柄や性格が私の中に今も存在していていい意味で憎たらしいと思ってしまいました。いっそ何もないみたいに忘れられたら楽なのに。なんてそんなことをできるはずはないとわかっています。
じゃあ彼のいない世界で私は何をしたら良いのでしょうか。どうすれば償えるのでしょうか。
そんなことを考えながら明日もまた、ここに彼がいないことを実感させられていくのでしょう。そしてそれを背負ってこれからの人生を生きていくのだと思いました。

課題

私は今全力で走っている。周りの景色など見えないくらいに。なぜ全力で走っているのかと問われても答えられない…
自分でもなぜ走っているのかわからなくなってしまった。けれども私はまだ走り続けなければならない。

事の始まりはほんの一カ月前であった。
その時の私にはこの後に起こる出来事なんて予想もできなかったであろう。
だって、平和な日常を送っていたからだ。
毎日夜遅くまで友達、家族と遊び、好きなだけ寝て、ご飯をお腹いっぱいになるまで食べて、フカフカのベッドで寝て、友達と他愛のない話で盛り上がり笑って、一日楽しく安心して過ごしていた。そう、何か特別な出来事がある訳でもなく、ただただ普通に当たり前の日常を起きてから寝るまで、何事もない平穏な毎日を送っていた。
しかし、事態は私の視界の隅で光ったスマホから映し出された一通の通知によって一変した。
バケモノが現れたのだ。私たちはそのバケモノに生活を脅かされ始めた。
それからの生活は過酷なものとなった。バケモノは人の脳を好んで食べる。その脳が賢ければ賢いほど美味い。
だから賢い人はその場で喰われ、そうでない人は賢くなるまでバケモノの支配下で働かされる。そして賢くなれば喰われるのだ。
人々はバケモノを恐れ、怯えて、遊ぶ事、食べる事、寝ることもできなくなった。
中にはそのバケモノと向き合い、必死に戦う者もいた。倒せた！と声を上

げるものもいたがそんな人はほんの一握りであった。
多くは、バケモノから必死に逃げ続け、ヤツにやられる、また、ヤツに応戦して倒れた人達ばかりだった。
私はその中の一人であった。
ヤツと遭遇した時はとりあえず応戦するものの、やられる前に手を引き逃げていた。
どれだけ倒されても奴らの数は減らない…
そう、賢い人を食べるとヤツらは増殖するのだ。
そうして戦っては逃げるを繰り返していくうちに月日は流れ、ジリジリとヤツは迫ってきた。
それでも私はヤツの隙を突き全速力で走って逃げた。

そうだ。そうだった。私はバケモノから逃げていたんだ。今、私は逃げるために走っているのだ。やっと私は自我を取り戻したようだ。
自我を取り戻した瞬間疲れを感じ始めた。
汗が吹き出し、息はキレ始めた。
そこである建物が目に入った。最後の力を振り絞り走った。そしてドアの前まで来た。私はドアノブに手をかけ、扉を開けた。
そして足を踏み出した瞬間
暗闇に落ちた。

夜明けの夢

この世界のはるか上に、神々が住んでいる国がある。
神々は、地上を常に監視しており、特に善い行いをした人々を死後、上空につれていき、魔法を与えた。
人々は、それらを〝魔法使い〟と呼んだ。
魔法使いは、神の命により、人々に相応の夢を見せる。
そしてその夢は、必ず現実になるのだ________

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

嫌な夢を見た気がする。知らない男がにたりと笑って何かを言っていた気がする。
まぁ、たかが夢だ。気にしないほうがいいだろう。
スマホで時間を確認する。速報で連続殺害事件についてのニュースがあがっていた。
もう４時を過ぎている。急がなければ。
外出する準備を始めると、

〝ピンポーン〟

こんな朝早くになんのようだ？
新聞が届くにも早すぎる…
物音を立てないよう、慎重にインターホンを覗く。

そこには、愛想よく笑った知らない男が立っていた。

一体何のようだ？注意深く観察していると、
「如月海さ～ん！早く出てくださいよ～！居るのはわかっているんですから～！」
俺は恐怖で震え上がってしまった。なぜ、こいつは俺の名前を知っているんだ？
はじめのうちは知らないフリをしていようと思っていたが、何度も繰り返しているから、出ることにした。
「どちら様ですか…？」
と尋ねると、
「あぁ、申し遅れました、私、未来決定協会の者でございます。一般的に、魔法使いと呼ばれていますね。」
男が答えた。

魔法使い…？一度聞いたことがある気がする。

俺の知り合いの仲間が、ある女にこれ以上悪いことができないよう、手足を折ると言われたそうだ。
その後、そいつは両手足が折れ、病院送りになり、姿を現すことがなかったそうだ。
そいつは前夜、似た夢をみたそうだ…

その魔法使いが俺に一体何のようだ…？まさかバレたのか…？いや、そんなはずはない。
ちゃんと片付けたはず…
そんな事を考えていると、男が話し始めた。
「私達未来決定協会の者たちはですね、善い行動、または悪い行動をとった人に、それ相応の夢を見させ、現実にするというのが仕事です。基本的

には姿は現しません。ですが、日々の中で、とてつもなく善い行動、悪い行動をとった人の前には現れます。今回は、その件で訪ねさせていただきました。」
相変わらず男は笑顔のままだ。だが、俺は段々と青ざめていった。鳥肌がブワッと立った。
平然としたくても、できない。
男が笑顔で一歩詰め寄ってきた。
「あなたは今回、日常の中で償いきれないような罪を犯しましたよね。私達はすべて知っているんです。あなたがこの数日で、殺した人数を。あなたが連続殺人事件の犯人ですね。
私は、この罪を償ってもらうために来たのです。」

ここから先は聞こえなかった。

カバンを掴み、男を押しのけ、全力で逃げた。
去り際に振り向いてみると、男は笑顔のままだった。
用意していた飛行機に乗り、国外にある次の隠れ家へと逃げていった。

ここなら大丈夫なはずだ。未来決定協会とかいう奴らからも、きっとここまで来たら大丈夫だろう。そう安心していると…

〝コンコンコン〟

誰かが来た。嫌な予感がする。この家にはインターホンも、覗き口もない。
恐る恐る扉を開けるとそこには…あの男が立っていた。
俺は絶望した。恐怖で動けずにいると、男が言った。

「私達から逃げることはできないと言ったじゃないですか〜！最後の話聞いてなかったんですか〜？」
それでも逃げようと、足を一歩動かすと、
「それじゃあ、素晴らしい地獄の夢を見てくださいね！永久保証付きですので安心してください！それでは、おやすみなさい！」
男が、夢で見たときと同じ、素晴らしくきれいで、それでいて恐ろしい笑顔を浮かべてそう言った。

____そこで俺の意識は途切れた。

～おすすめ本紹介～

《紹介する本》

・博士の愛した数式

(小川洋子)

・クスノキの番人

(東野圭吾)

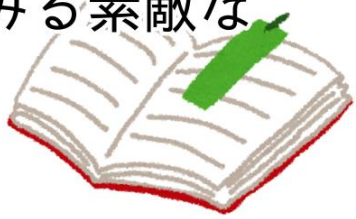
・アルジャーノンに花束を

(ダニエル・キイス)

○博士の愛した数式

あらすじ

主な登場人物は記憶が80分しかもたない数学者の博士とそんな彼の常に初対面の家政婦の私、その息子ルート。
数十分だけの不自由な世界の中一心に数学を愛する、そんな博士の愛し方に魅了されてしまうような心にすっと沁みる素敵な物語です。



◯クスノキの番人

あらすじ

祈れば願いが叶うと言われているクスノキ。その番人を任されている青年とクスノキの元へ訪れるさまざまな過去、立場を持った祈念者達の物語。

『容疑者Xの献身』や『ナミヤ雑貨店の奇蹟』などで有名な東野圭吾さん著の是非読んで欲しい面白い本です。

◯アルジャーノンに花束を

あらすじ

32歳になっても幼児並みの知能しかないチャーリイに舞い込んだ知能が上がるという夢のような手術の話。飛びついた主人公は白ネズミのアルジャーノンを競争相手に手術を受ける。しかし天才になった反面、過去の自分に向けられていた周りの目、感情に気づいてしまいます。幸せとは何か考えさせる本です。

目指せ校閲ガール

校正・校閲をしてみよう！

校正・校閲とは、原稿の誤りを正す専門的な作業のこと！２０１６年に放送されたドラマ「地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子」でこの職業を知った人も多いのでは…？

校正とは？？

校正とは、表記の誤りを正すこと。文章を読む、というよりは言葉の一つ一つを見て”誤字脱字”や英単語なら”スペルミス”が無いか確認します。

校閲とは？？

校閲とは、文章中の誤った情報を正すこと。文章に矛盾がないか、事実と異なることが書かれていないか、重複した表現がないかなどを確認します。

例を見てみよう！

校正・校閲の違い

たとえば、

「この赤ちゃんの体重は１００Ｋｇだ。」

を校正・校閲すると…？

校正

⇓半角　⇓小文字

「この赤ちゃんの体重は１００Ｋｇだ。」

▶全角数字から半角数字に直す指摘

▶単位表記の規則に従い、Ｋを小文字にする指摘

校閲

⇓要確認

「この赤ちゃんの体重は１００Ｋｇだ。」

▶赤ちゃんの体重が１００キロなんてことはありえないのでもう一度確認させる指摘

実際にやってみよう

問題

1、「本能寺の辺は1580年に起こった。」

2、「iPhoneはappple社の製品だ。」

解説

⇓変　⇓1582年

1、「本能寺の辺は1580年に起こった。」

▶「辺」を「変」に訂正させる指摘
▶本能寺の変が起こったのは1582年

2、「iPhoneはappple社の製品だ。」

⇑apple

▶"apple"のスペルミスを指摘

まとめ

　校正・校閲の世界を覗いてみましたが、いかがでしたか？？校正・校閲どちらも本の出版や、文章を扱う場面で欠かせない職業です。

　もしこの職業に興味が湧いてきたなら、１度調べてみるといいかも…！